

「うなぎ」について ①

おやさと研究所教授  
佐藤 孝則 *Takanori Sato*

天理教における「元初まりの話」は、人間世界創造の話であるとともに、人間救済のために明らかにされた真実の話でもある。そこには、さまざまな水域棲動物が比喩的に登場する。それらは現存する動物であったり、想像上の動物であったりするが、そのこと自体は特に問題ではない。

元来、この「話」は根源的で普遍的なものであることから、その神意を理解することは決して容易ではない。そうであるからこそ、教祖は“見立て”という理解しやすいたとえ話を通して、私たちにさまざまな守護を教え示されたのである。

『天理教教典』「第三章」には、月日親神が、「東の方からうなぎを、……引き寄せ、これにも又、承知をさせて貰い受け、食べてその心味を試された」とあり、その理に対して「くもよみのみこと」の神名を授けられたとある。また「第四章」では、「くもよみのみこと」は「人間身の内の飲み食い出入り、世界では水気上げ下げの守護の理」と教え示された。

では、どうしてうなぎは「飲み食い出入り、水気上げ下げ」の道具として定められたのか。このことを検討する前に、本稿では、うなぎは“鰻”あるいは“ウナギ”として理解していいのかどうか、このことについて以下に述べる。

“鰻”について

江戸時代中期（1712年）に寺島良安が編集した『和漢三才図会』は、幕末から明治初期にかけて世上に流布し、庶民にも広く親しまれていた当時の百科事典である。この『図会』（全105巻）は、明治初期、少年時代を過ごした南方熊楠がその内容をすべて書写したように、当時における一般的で専門的な全書だと考えられている。

『和漢三才図会』（東洋文庫版）の「鰻鱺」の項には、「うなぎ」というルビがふられ、別名として「白鰻」「蛇魚」が、和名として「宇奈木」が記されている。そして「鰻鱺」については、中国の李時珍が1578年に完成させ、1596年に上梓した『本草綱目』を引用して以下のように紹介している。

鰻鱺の状は蛇のようで、背に肉髯ひげがあつて尾まで連なっている。鱗はなく舌があり腹は白い。大きなもので長さ数尺。脂膏あぶらが多い。よく深い穴を穿る。雄ばかりで雌はいない。影によって鰻鱺と交し、その子はみな鰻の鬣やまつめうなぎについて生まれる。それで鰻鱺という。

さらに、この『図会』の「鰻鱺」の項には、訳注者の竹島淳夫が以下のように解説している。

鰻鱺は冬春には泥穴に蟄居し、五月になるとおよぎ出でくる。このとき味は勝れている。四、五月に子を生むが、織ほそくて長さ三、四寸で針のようである。これを針鰻鱺はりうなぎという。漸く成長すると川上に行く。けれども影で鰻魚交わつて子を生むという説はおかしい。鰻のいない処にもまた鰻鱺が多くいるからである。また久しく湿浸した薯蕷やまのいもが変じて鰻鱺に化する場合がある、という。……およそ鰻鱺は滑利なめめめで泥の中を潜くぐるので捕えにくい。……江州の勢田せうでん、城州せうしゅうの宇治うぢのものがともに有名で、鮮あじにするると大へん美味である。

『本草綱目』に記された「鰻鱺」は、全長は数尺で蛇のよう

に細長く、鱗はなく腹は白くて脂身が多いとある。ただ、鰻鱺と交配するとあるが、もしも「鰻鱺」が鰻（図1）で、「鰻鱺」が鰻やつめうなぎであれば、異種間交雑は生物学的にはまったく起きないという原則にしたがうと、『本草綱目』に記された表現はあり得ないことになる。また、『和漢三才図会』の訳注者の竹島も、「鰻のいない処にもまた鰻鱺が多くいるから」という理由で、その説はおかしいとしている。その竹島は、4、5月には全長9～12cmの針のような針鰻鱺が生まれると解説したが、はたしてその説は本当だろうか。

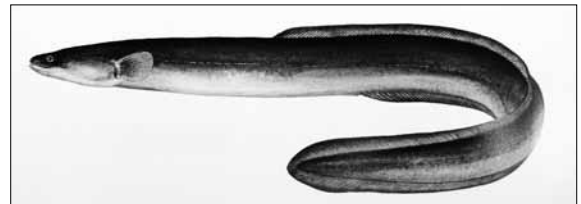


図1 ニホンウナギ。『原色日本淡水魚類図鑑 全改訂新版』より。

“ウナギ”について

2006年2月23日、東京大学は2005年6月に海洋研究所がマリアナ諸島西方海域で孵化したばかりのプレレプトケファルス (Pre-leptocephalus) を大量採集し（図2）、これらがニホンウナギ (*Anguilla japonica*) であることを遺伝子解析で確認した、と記者発表した。

世界には18種のウナギが分布するが、本種のプレレプトケファルスが大量に採集されたのは世界初であり、およそ半世紀にわたるニホンウナギの産卵場所確認調査は、これでひとまず終止符を打ったことになる。この成果は、同大気海洋研究所の塚本勝巳教授（現、日本大学教授）らによって、同日に発行された『nature』誌（439巻7079号）に掲載された。

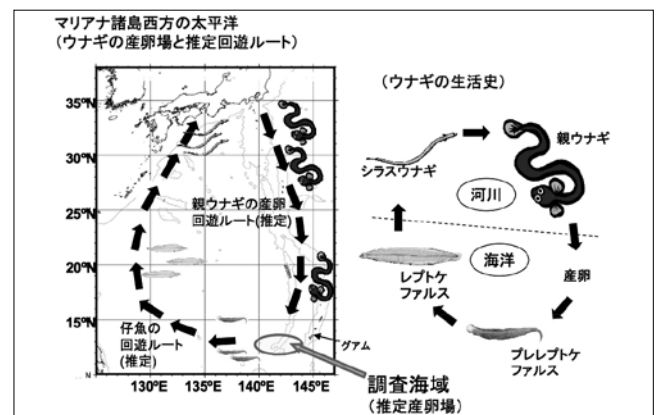


図2 ニホンウナギの産卵場所と回遊経路、および生活史。国立研究開発法人水産研究・教育機構のホームページより。

この成果が示すように、ニホンウナギの産卵場所はフィリピン東方海域や日本列島の河川流域ではなく、マリアナ諸島西方海域であることが初めて明らかにされた。これにより、竹島が4～5月に針鰻鱺が生まれると解説したことは、明らかな誤りであることがわかる。それは、孵化したばかりのプレレプトケファルスが、日本の河川流域ではなくマリアナ諸島西方海域で誕生しているからである。

交配や繁殖場所に誤りはあるが、『和漢三才図会』の「鰻鱺」は「鰻」「ウナギ」であり、うなぎとは同義と考えても良い。